

## 福井藩藩校『改正学問所書目』の韓書・琉書

膽 吹 覚

### はじめに

『改正学問所書目』は、福井藩藩校の学問所（明道館の前身）の蔵書目録である。<sup>(1)</sup>現在は福井県立図書館松平文庫に所蔵されている。その書誌を記すと一。

写本。10冊本。成立は福井藩藩校が学問所と称した期間、すなわち、安政2年（1855）1月9日から同年6月25日までと推定される。著者未詳。縦29cm×横20cm。袋綴。印記はない。外題は「改正学問所書目」。内題は「重訂学問所書目」。序文・跋文・奥書はない。丁数は第1冊が48丁、第2冊が87丁、第3冊が99丁、第4冊が76丁、第5冊が84丁、第6冊が91丁、第7冊が87丁、第8冊が156丁、第9冊が103丁、第10冊が67丁、の計895丁。その内容は掲載順に、経書部は易類（106）、書類（56）、詩類（66）、礼類（118）、楽類（7）、春秋類（126）、総経類（75）、孝経類（28）、四書類（216）、小学類（195）、史書部は正史類（180）、編年類（120）、紀事本末類（21）、別史類（53）、雑史類（102）、詔令奏議類（24）、伝記類（153）、史鈔類（58）、載記類（31）、時令類（10）、地理類（188）、職官類（40）、政書類（121）、目録類（55）、史評類（41）、子書部は儒家類（356）、兵家類（81）、法家類（37）、農家類（26）、医家類（177）、暦算類（22）、術数類（63）、芸術類（80）、譜録類（63）、雑家類（426）、叢書類（70）、類書類（232）、小説類（243）、釈家類（128）、道家類（97）、集書部は別集類（1338）、総集類（717）、文史類（111）、全部は献本類（58）、寄納書類（139）、法帖類（75）、別書類（18）、林家著述類（278）、の計7025点。この7025点という掲載書名数は、藩校の蔵書目録の掲載書名数としては、管見に及ぶ範囲では最多である。なお、本目録には一部に朱筆による訂正箇所がある。保存状態は良好である。

『改正学問所書目』の各類の末尾には、韓書、琉書の項目が立てられているところがある。ここにいう韓書とは朝鮮本で、琉書とは琉球版のことである。管見に及ぶ範囲では、藩校の蔵書目録で、朝鮮本と琉球版を漢籍・国書とは区別して、独立した1項目として掲載したものは、この『改正学問所書目』以外にはないようである。<sup>(2)</sup>『改正学問所書目』はその掲載書名数の多さも然ることながら、韓書と琉書の項目を立てている点に於いても、注目されるのである。そこで、本稿では『改正学問所書目』に掲載された韓書と琉書について少し述べてみたい。

## 1. 韓書

『改正学問所書目』には149点の韓書が掲載されている。そのすべてを掲載順に掲出すると、右の如くである。なお、( ) 内の数字は部類ごとの書名数(重複を含む)を、[ ] 内の数字は『改正学問所書目』に記載された冊数を、そして、[ ] の右に併記した略記号は、「日」が藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』(京都大学学術出版会、2006年2月刊)、「蓬」が朝鮮学会編『蓬左文庫朝鮮本展覧目録』(昭和32年10月序)、「大」が『大阪府立図書館蔵韓書目録』(昭和43年3月刊)、「東」が国立国会図書館東洋文庫編『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』(昭和54年3月刊)、「対」が岡村繁「対馬宗家文庫漢籍(朝鮮本)提要」(『九州文化史研究所紀要』27号、昭和57年3月刊)、「一」が上記の文献すべてに該当しないことを意味する。

### 『改正学問所書目』収載韓書一覧

#### ●経部(20)

##### ○易類(7)

1. 易学啓蒙補要解〔2〕 —
2. 易学啓蒙補要解〔6〕 —
3. 易学啓蒙補要解〔6〕 —
4. 易学啓蒙伝疑〔2〕 —
5. 易学啓蒙伝疑〔2〕 —
6. 易学啓蒙伝疑〔2〕 —
7. 周易大文〔2〕 —

##### ○書類(1)

8. 書伝大文〔2〕 東・対

##### ○礼類(5)

9. 礼記浅見録〔10〕 東
10. 国朝五礼序例〔2〕 —
11. 家礼考証〔3〕 —
12. 奉先雜儀〔1〕 東・対
13. 服式〔1〕 —

##### ○春秋類(2)

14. 編年春秋左氏伝〔1〕 —
15. 春秋左氏伝〔9〕 —

##### ○四書類(2)

16. 続大学或問〔1〕 —

17. 孟子諺解〔4〕 —

##### ○小学類(3)

18. 四声通解〔2〕 東
19. 訓蒙字解〔1〕 —
20. 千文諺文〔1〕 —

#### ●史部(45)

##### ○編年類(1)

21. 通鑑綱目訓義〔110〕 蓬

##### ○雜史類(8)

22. 貞觀政要注解〔4〕 —
23. 西征録〔1〕 —
24. 国朝征討録〔1〕 東
25. 懲毖録〔4〕 東
26. 懲毖録〔2〕 東
27. 隠峰野史別録〔1〕 東・対
28. 漂海録〔3〕 東

##### ○伝記類(11)

29. 宋七先生像賛〔1〕 —
30. 治隠先生言行拾遺〔1〕 東
31. 洪公行状〔1〕 対
32. 景賢録〔1〕 東・大

33. 海東名臣録〔9〕 東・大

34. 国朝儒先録〔4〕 東

35. 孝行録〔1〕 東・対

36. 三綱行実（図カ）〔3〕 東・対

37. 続三綱行実（図カ）〔1〕 東

38. 二倫行実（図カ）〔1〕 東・大

39. 巳卯録〔1〕 —

#### ○史鈔類（2）

40. 歴代要録〔1〕 —

41. 歴代世年歌〔1〕 —

#### ○載記類（5）

42. 東国通鑒〔57〕 東・大

43. 国朝宝鑒〔5〕 東・大

44. 東史纂要〔8〕 —

45. 麗史提綱〔23〕 東

46. 三国史記〔9〕 東・大

#### ○地理類（5）

47. 海東諸国記〔2〕 東

48. 海東諸国記〔1〕 東

49. 東京雜記〔3〕 東・大・対

50. 朝鮮国図〔1〕 —

51. 新增東国輿地勝覧〔20〕 東

#### ○官職類（2）

52. 警民編〔1〕 —

53. 朝鮮官職考〔1〕 —

#### ○政書類（11）

54. 経国大典〔5〕 東

55. 経国大典〔6〕 東

56. 通文館志〔3〕 東・大・対

57. 増正文鄰志〔2〕 東・大

58. 日観要攷〔1〕 —

59. 攷事撮要〔2〕 東・大・対

60. 忠州救荒切要〔1〕 —

61. 陣法〔1〕 対

62. 兵政〔1〕 —

63. 教閱儀注〔1〕 —

64. 詞訟類抄〔1〕 —

#### ●子部（43）

##### ○儒家類（21）

65. 入学図説〔2〕 蓬

66. 入学図説〔1〕 蓬

67. 朱子書節要〔20〕 東・大

68. 朱子書節要〔8〕 東・大

69. 自省録〔2〕 —

70. 自省録〔2〕 —

71. 西銘考証講義〔1〕 —

72. 聖学十図〔1〕 東

73. 天命図説〔1〕 東

74. 天命図説〔1〕 東

75. 求仁録〔2〕 東・対

76. 聖学輯要〔5〕 大・対

77. 擊蒙要訣〔1〕 東・対

78. 擊蒙要訣〔1〕 東・対

79. 擊蒙要訣〔1〕 東・対

80. 鬼神論〔1〕 —

81. 夙興夜寢箴〔1〕 —

82. 童子習諺解〔1〕 —

83. 童蒙先習〔1〕 東

84. 作聖図論〔1〕 —

85. 旅軒性理説〔6〕 —

##### ○農家類（2）

86. 農家集成〔2〕 大・対

87. 農家集成〔1〕 大・対

##### ○医家類（6）

88. 医方類聚〔184〕 —

89. 医方類聚〔41〕 —

90. 医方類聚〔264〕 —

91. 東医宝鑑〔25〕 東・大

92. 治腫秘方〔1〕 —

93. 牛馬医法〔4〕 —

○芸術類(2)

94. 東人詩話〔1〕 東

95. 破閑集〔1〕 大

○譜録類(3)

96. 菁川養花小録〔1〕 —

97. 鷹鵠方〔1〕 東

98. 鷹鵠方〔1〕 東

○類書類(3)

99. 続蒙求〔4〕 東

100. 続蒙求〔4〕 東

101. 類苑叢宝〔23〕 東・大

○小説類(6)

102. 補閑〔1〕 蓬・東・大

103. 櫟翁稗説〔1〕 東・大

104. 諛聞瑣録〔2〕 蓬

105. 筆苑雜記〔1〕 東

106. 慵齋叢話〔5〕 東

107. 谿谷漫筆〔1〕 東

●集書(41)

○別集類(31)

108. 桂苑筆耕〔4〕 日・東・大・対

109. 村西集〔4〕 —

110. 陶隱集〔1〕 日・蓬・東・対

111. 企齋集〔4〕 日・対

112. 晦齋集〔4〕 日・蓬・東・大・対

113. 青坡集〔1〕 日・東

114. 晋山世稿〔1〕 —

115. 葛川集〔2〕 日

116. 東岡集〔6〕 日

117. 退溪文集〔28〕 日・東・対

118. 徐花潭集〔1〕 日・蓬・東

119. 立巖集〔2〕 日

120. 栗谷集〔7〕 日・東

121. 林白湖集〔2〕 日・対

122. 十省堂集〔2〕 —

123. 嶽堅詩集〔1〕 対

124. 玄洲集〔5〕 日・東

125. 石洲集〔1〕 日・東・大

126. 旅軒文集〔7〕 日・東

127. 西厓文集〔11〕 日・東・大・対

128. 大觀齋亂稿〔2〕 日・蓬

129. 東岳集〔8〕 —

130. 芝山文集〔2〕 日

131. 灌圃詩集〔1〕 日

132. 蘭雪軒詩集〔2〕 日・東

133. 蘭雪軒詩集〔1〕 日・東

134. 白洲集〔10〕 —

135. 復齋集〔2〕 日

136. 海峰集〔1〕 日

137. 誠信堂諸記帖〔1〕 —

138. 梅月堂集文藁〔9〕 日・蓬

○総集類(7)

139. 東文粹〔3〕 日・蓬

140. 三韓詩龜鑑〔1〕 —

141. 三韓詩龜鑑〔1〕 —

142. 皇華集〔23〕 大・対

143. 晋陽聯藁〔1〕 東・対

144. 東国壯元集〔1〕 日

145. 風騷軌範〔21〕 日

●全(4)

○寄納書類(1)

146. 朱子語類 —

○法帖類(3) —

147. 朝鮮法書〔4〕 —

148. 七君子墨蹟〔1〕 —

149. 朝鮮酒誥〔1〕 —

『改正学問所書目』の全収録書籍数が7025点であるから、左記の韓書149点はその約2%に相当する。その内訳は、経書が20点（易類〔7〕、書類〔1〕、礼類〔5〕、春秋類〔2〕、四書類〔2〕、小学類〔3〕）、史書が45点（編年類〔1〕、雑史類〔8〕、伝記類〔11〕、史鈔類〔2〕、載記類〔5〕、地理類〔5〕、官職類〔2〕、政書類〔11〕）、子書が43点（儒家類〔21〕、農家類〔2〕、医家類〔6〕、芸術類〔2〕、譜録類〔3〕、類書類〔3〕、小説類〔6〕）、集書が38点（別集類〔31〕、総集類〔7〕）、寄納書類が1点、法帖類が3点である。上記の内訳を百分率に換算するならば、経書が13%、史書が30%、子書が29%、集書が26%、法帖類が2%となる。福井藩藩校（学問所）の韓書は経書がやや少ないが、史書、子書、集書はほぼ均等にバランス良く蒐蔵されていたといえるであろう。

それでは、福井藩はこれらの韓書をいつ、どのような経緯で購入したのであろうか。藤本幸夫氏は『日本現存朝鮮本研究 集之部』で、日本現存朝鮮本の伝来時期について、（1）室町末期以前の伝来本、（2）豊臣秀吉朝鮮侵略時の将来本、（3）江戸時代対馬宗藩を通じての伝来本、（4）明治以降の書肆・学者等による購入本、の4期に分けている。本稿で考察している『改正学問所書目』は江戸後期の安政2年（1855）1月9日から同年6月25日までと推定されるから、そこに収載された149点の韓書（朝鮮本）の伝来時期は、藤本氏の（1）～（3）の期間ということになるであろう。しかし、それ以上の細かな推定は、現在のところ困難である。また、その購入経緯もそれを記した史料、すなわち、福井藩或いは松平家による韓書購入記録を私は未だ見出せずにいる。

福井藩藩校学問所は、安政2年6月25日よりは明道館と改称され、明治2年（1869）からは明新館となる。明道館の蔵書目録は『明道館書目』と称し、現在は福井県立図書館松平文庫と福井市立図書館にそれぞれ1点ずつ架蔵されている。この2点の『明道館書目』は共に明治初期の成立と推定される。

上記2種の『明道館書目』は、『改正学問所書目』のように韓書を項目として立ててはいない。『改正学問所書目』に韓書として掲載された149点に関して、上記2種の『明道館書目』との照合をはかった結果、『懲毖録』、『朝鮮官職考』、『自省録』、『夙興夜寢箴』の4点を、2種の『明道館書目』それぞれから見出すことができた。ただし、これはあくまでも書名が一致したということであって、2種の『明道館書目』に掲載されている『懲毖録』、『朝鮮官職考』、『自省録』、『夙興夜寢箴』が韓書である、ということではない。寧ろ肝心なことは、上記の4点以外の145点の韓書が、2種の『明道館書目』に掲載されていないということである。このことは『改正学問所書目』に掲載された149点の韓書のほぼすべてが、安政2年（1855）6月25日から明治初期までに、藩校の書庫から消えたことを意味している。これはしかし、『福井藩明道館書目』の解説で私が指摘したとおり、韓書に限ったことではない。『改正学問所書目』に於いて7025点あった書籍が、市立図書館本『明道館書目』では3754点に、松平文庫本『明道館書目』では2848点に、それぞれ減少しているのである。つまり、『改正学問所書目』成立から2種の『明道館書目』成

立までの期間に、韓書のみならず、漢籍では経書、史書、子書、集書のすべてにわたって、大量の典籍の散逸、或は亡失があったのではなかったか、ということが推測されるのである。しかし、現在のところ、この期間に明道館が火災等の災害に見舞われたという記録は知られていないようである。

福井藩校旧蔵本は、現在は国立国会図書館、福井県立図書館松平文庫、福井市立図書館に分散して所蔵されている。このうち、福井県立図書館編『松平文庫目録』(昭和43年3月刊行)には、『改正学問所書目』に掲載された149点の韓書と同名の書籍を見出すことはできなかったが、福井市立図書館編『和漢古書分類目録』(昭和54年3月刊)には、『自省録』と『夙興夜寢箴』の2点が見える。

まず、福井市立図書館蔵『自省録』(2点あり)は鵜飼石齋点による和刻本であって、朝鮮本ではない。

次に、『夙興夜寢箴』もまた、朝鮮本ではないようである。福井市立図書館蔵『夙興夜寢箴』の書誌を記すと一。1冊本。刊本。外題「夙興夜寢箴」(題簽)。内題「夙興夜寢箴」。縦26cm×横18.7cm。表紙は深緑色。4つ目綴。柱題はその一部が破損しているために「夙興夜(破損)」としか見えない。丁数は全11丁。半丁行数は12行。図版はない。巻末に「隆慶二年十二月日印」とある。隆慶2年は西暦1568年である。この書誌から見ると、福井市立図書館蔵『夙興夜寢箴』は、一般的な朝鮮本の特徴を備えているとはいえない。しかし、福井市立図書館蔵『夙興夜寢箴』には「越国文庫」「図書寮」の印記に加えて、「出簞」の印が捺されている。この「出簞」の印は、市立図書館本『明道館書目』に於いて捺されていた8種類の書籍の貸し出しを表す印記の1つである。ゆえに、福井市立図書館蔵『夙興夜寢箴』が嘗ては明道館に所蔵されていたことはほぼ間違いないであろう。すなわち、福井市立図書館蔵『夙興夜寢箴』は、確かに福井藩藩校明道館旧蔵本ではあるが、朝鮮本とはいえないのである。そもそも『夙興夜寢箴』は、『増補文献備考』第246巻「芸文考」の「儒家類」には、「夙興夜寢箴註一卷 文簡公盧守慎撰」とあるから、正しくは『夙興夜寢箴註』と称するのであろう。この『夙興夜寢箴註』を『改正学問所書目』では『夙興夜寢箴』と記したのであろうか。また、香川大学附属図書館編『神原文庫分類目録和漢書之部』に「夙興夜寢箴 陳柏撰 盧守慎注 (江戸初刊) 1冊 125.5」とあるから、日本では『夙興夜寢箴』の書名で流布したものもあったようである。いずれにせよ福井市立図書館蔵の『自省録』『夙興夜寢箴』は、ともに韓書ではないといってよいであろう。

さて、日本現存の朝鮮本に関しては藤本幸夫氏による長年の研究があって、それによってその実態が知られるわけであるが、現在のところ、藤本氏のそれは、『日本現存朝鮮本研究 集之部』として、その集部のみが公刊されており、今後の刊行が俟たれる状況である。そこで、本稿では『日本現存朝鮮本研究 集之部』を補うべく、朝鮮学会編『蓬左文庫朝鮮本展観目録』(昭和32年10月序)、大阪府立図書館蔵韓書目録(昭和43年3月刊)、国立国会図書館東洋文庫編『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』(昭和54年3月刊)、岡村繁「対馬宗家文庫漢籍(朝鮮本)提要」(『九州



文化史研究所紀要』27号、昭和57年3月刊）との照合を行なった。照合の結果は、すでに掲載した一覧表にあるとおり、149点中92点が一致し、その一致率は62%であった。しかし、これはあくまでも上記6点の目録との照合であって、その集書以外は、全ての日本現存朝鮮本と照合したわけではない。そこで集書に限ってみると、38点中31点が一致した。その一致率は82%である。今回の照合では、『村西集』、『晋山世稿』、『十省堂集』、『東岳集』、『白洲集』、『誠信堂諸記帖』、『三韓詩龜鑑』の7点は、『日本現存朝鮮本研究 集之部』には掲載されていなかった。これら7点の韓書は『改正学問所書目』にその書名が掲載されているから、確かに日本に伝来し、近世後期に福井藩藩校学問所に所蔵されていたことは確かであるが、今日ではその存在が未だ確認されていない、ということになるであろう。

## 2. 琉書

『改正学問所書目』に記載された琉書（琉球版）は、計7点（『中山詩文集』の重複を含む）である。その全てを掲出すると一、

- 1.『指南広義』（史書、地理類）
- 2.『要務彙編』（子書、類書類）
- 3.『靈堂燕游草』（集書、別集類）
- 4.『四知堂詩稿』（集書、別集類）
- 5.『中山詩文集』（集書、総集類）
- 6.『中山詩文集』（集書、総集類）
- 7.『中山雜俎』（集書、総集類）

これら7点の琉書は、しかし、『改正学問所書目』に記載された朝鮮本と同じく、明道館の蔵書目録である松平文庫本『明道館書目』と市立図書館本『明道館書目』には掲載されておらず、また、福井藩藩校旧蔵本の目録である『松平文庫目録』と『和漢古書分類目録』にも記載されていない。つまり、『改正学問所書目』に記載された琉本は、前章で考察した韓本と同様に、その現在の所在は不明なのである。

管見に従えば、日本に現存する全ての琉球版の書誌を記載した目録は、現在のところないようである。そこで、武藤長平「琉球訪書志」（『歴史地理』第29巻第1-3号、大正6年1-3月刊）、『日本古典書誌学辞典』（岩波書店、平成11年3月刊）の「琉球版」（高津孝氏担当執筆）の項目、『史料が語る琉球』（平成14年度琉球大学附属図書館貴重書展図録）、の3点に記載された琉球版との照合を図った。その結果、『指南広義』、『要務彙編』、『中山詩文集』、『中山雜俎』は上記3点中に確認できたが、『靈堂燕游草』と、『四知堂詩稿』の2書は見出すことができなかった。無論、琉球版に関する研究は上記の3点の文献だけではない。ゆえに、この照合を以って、未発見の琉球版の存在を論じるつもりはない。本稿では、『改正学問所書目』の琉書と、手元にある先

行研究との照合を図ったに過ぎないことを記しておく。

### むすび

藩校の蔵書目録は、藩校の蔵書の実態を知るために、まず見るべき史料といってよいであろう。もちろん、藩校の蔵書の実態を知りたいのであれば、藩校旧蔵本を所蔵する機関（図書館あるいは藩校の後身の学校）が編纂した藩校旧蔵本の目録を見ればよいのではないか、という意見もあるであろう。しかし、藩校の中には、近江大溝藩脩身堂や同膳所藩遵義堂のように、藩校旧蔵本の行方が現在のところ不明なままの藩校もある。こうした場合は、藩校の蔵書目録がなければ、その蔵書の実態を知ることはできない。また、藩校旧蔵本が残されていても、それがすべてその藩校の蔵書とは限らない。今日伝わるところの藩校旧蔵本の中には、明治初期に藩校を継承するかたちで設立された学校の附属図書館の蔵書や、明治以降に旧藩士から寄贈された書籍などが混入していることの多いことは、藩校旧蔵本の調査を経験した人であれば、首肯いただけるであろう。加えて、朝倉治彦氏が「上野図書館所蔵藩校旧蔵本略記」（『文献』2号、昭和34年12月刊）で、蓬左文庫の幾茂三郎氏からの御教示として記しているとおり、藩校旧蔵本には無印のものが多くあり、藩校の蔵書印の有無を以って藩校の蔵書か否かを判断することはできない。本稿で考察した福井藩藩校の場合も、その旧蔵本に韓書と琉書はなく、福井藩藩校に149点もの韓書と7点の琉書が所蔵されていたことは、『改正学問所書目』によって初めて知られるのである。

福井藩藩校の『改正学問所書目』は、韓書と琉書を他と区別して、1項目立てて掲載している。こうした構成は、管見に及ぶ範囲では、藩校の蔵書目録では他に例を見ない。また、その中の韓書は149点であり、その多さも然ることながら、その内容に於いても、経書がやや少ないものの、史書、子書、集書にわたって、ほぼバランスよく蒐集されていたことも注目されてよいであろう。福井藩藩校に於ける書籍の蒐集が、漢籍・和書に止まらず、広く韓書、琉書にまで及んでいたことは、日本図書館文化史（日本文庫史）に於いても特筆すべきであろう、と私は考えている。しかし、残念なことに、福井藩藩校が蒐集した韓書と琉書は、現在ではその存在を確認することができない。中でも韓書は、『日本現存朝鮮本研究 集之部』に掲載されていない7点の集書が含まれている。福井藩藩校旧蔵本には、「越国文庫」、「図書寮」、「明道館図書記」、「東明道館」、「福井藩兵学所」、「数学所」、「明新館」、「明新館図書記」などの蔵書印が捺されていることが多いので、これらの印記が捺された韓書・琉書に関する情報をお持ちの方からのご教示を頂ければ幸甚である。

### 〈注〉

1. 本稿に於ける『改正学問所書目』からの引用は、朝倉治彦監修『福井藩明道館書目』第5巻～第9巻収録『改正学問所書目』（全9巻9冊、ゆまに書房、平成15年12月刊）に拠る。なお、『改正学問所書目』をはじめとする福井藩藩校の蔵書目録3点に関しては、『福井藩



明道館書目』第9巻に解説（膽吹担当執筆）がある。

2. 長門国萩藩明倫館の蔵書目録である『長門国明倫館書庫目録』（萩市立萩図書館蔵）に記載された『貞観政要』の冊数の傍らに朝鮮本であることが注記されているが、朝鮮本のみをまとめて項目立てしたものではない。

#### 〈付記〉

本稿は文部科学省科学研究費（若手B・課題番号17720032）「藩校の蔵書目録の研究－北陸地方を中心に－」の成果である。本稿執筆に際して、朝倉治彦先生と藤本幸夫先生からご教示をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。